

# クラーク室内管弦楽団 第33回演奏会

“今宵はドイツ・ロマン派音楽の神髄で”

2014年8月27日(水) 19:15 開演

北海道大学クラーク会館講堂

入場無料

プログラム

C. M. von ウェーバー (1786-1826)

歌劇「魔弾の射手」序曲

W. A. モーツァルト (1756-1791)

ピアノ協奏曲第24番ハ短調K. 491

ピアノ独奏：植田克己 (東京芸術大学教授)

J. L. F. メンデルスゾーン B. (1809-1847)

交響曲第5番ニ長調Op. 107「宗教改革」

指揮：奥 聡 (メディア・コミュニケーション研究院)

お問い合わせ：011-706-6595

(工学研究院・フロンティア化学教育研究センター 下川部雅英)

## プログラム・ノート

30代前半で宮廷楽長としてドレスデンへ移ったウェーバーは、ドレスデン歌劇場の運営にあたり、それまで宮廷では主流だったイタリア・オペラに挑戦する意味で、自らのドイツ・オペラ作品を書いていきました。そして本日その序曲を演奏する『魔弾の射手』はウェーバー円熟期の34歳の時（1821年）に作曲された全3幕のオペラです。これは、オペラにおけるドイツ・ロマン主義を確立した金字塔的作品と考えられ、のちのワーグナーやベルリオーズなどに大きな影響を与えたといわれています。

本日の2曲目、モーツァルトの**ピアノ協奏曲第24番**は1786年（30歳）に作曲され、これもモーツァルト円熟期の作品といえるでしょう（同じ年に『フィガロの結婚』も作曲されています）。モーツァルトが生きていた時代は、まさにピアノという楽器の改良が日進月歩で進み始めた時代で、モーツァルトが最後の10年を過ごした大都会のウィーンでも、ピアノの性能がどんどんと向上していたようです。そうした「新しい」楽器の特性を最大限に引き出すかのように、嬉々として作曲をしているモーツァルトの姿が目に見えます。初演はほとんどモーツァルト自身が独奏を務めたという事情からか、残されている手書きの楽譜にはところどころピアノのソロパートが未完成の部分もありました。モーツァルトのピアノ協奏曲27曲中、短調の曲は第20番とこの第24番だけで、独特の雰囲気を持った作品となっています。本日は東京芸術大学の植田克己さんをソリストにお招きしての演奏です。どのような響きができるか、お楽しみ下さい。

本日最後に演奏する**交響曲第5番「宗教改革」**は、メンデルスゾーンが20歳前後に作曲した作品です。5つの交響曲のうち出版が最後になったため「第5番」となっていますが、実際には第2番目に作曲された交響曲です。ドイツ・ロマン派音楽のなかでも重要な役割を果たしているメンデルスゾーン、幼い頃からモーツァルトにも負けない神童ぶりを発揮していたようです。交響曲第1番の作曲は、15歳の時（1819年）。そして同じ年に、あの「夏の夜の夢」序曲の作曲もしています。メンデルスゾーンの大きな功績の1つにバッハの「再発見」があります。それまで、メンデルスゾーンの時代、バッハの楽譜はたくさん残されていたのですが、一般にはほとんど忘れられ、演奏会で取り上げられることもほとんどなくなっていたようです。今では信じがたいことですが、平均律クラヴィア曲集や無伴奏チェロ組曲などは、子ども用の練習曲であり、演奏会で取り上げるような音楽とは考えられていなかったようです。メンデルスゾーンが1829年にベルリンでおこなったバッハの「マタイ受難曲」の演奏会がバッハの「再発見・再評価」の大きなきっかけとなりました。そのようなメンデルスゾーンですが、交響曲第5番の出来には満足していなかったようです。作曲は、1830年のベルリンでのルーテル教会300周年記念祭での演奏予定でされたのですが、健康上の問題などで間に合わず、初演は改稿を経て1832年に同じベルリンで行われました。終楽章の冒頭には、ルターが1529年に作曲したとされるコラール「神はわがやぐら」が使用され、第4楽章全体を通してこのテーマが使われます。結局、総譜の出版を許さなかったほど、メンデルスゾーン自身はこの曲が気に入らなかったようですが、本日の演奏は皆さんのお耳にどのように響くでしょうか。

（メディア・コミュニケーション研究院 奥 聡）